

秋の声

森岡 正作

祝 祭 の 日 か 船 虫 の 賑 々 し
逆 光 の 貌 持 ち 帰 る 夏 の 果
信 玄 の 甲 冑 に あ る 秋 の 声
棚 経 に 疲 れ の 見 ゆ る 僧 の 袈 裟
刀 豆 や 根 性 論 の 廃 れ を り
下 り 籾 付 録 の や う に 雑 魚 か か る
鰯 の 骨 抜 き 兄 を 悼 み け り

さきがくる

今年の稲刈りも終わった。半月前なら豊穰な稲穂の波が大地をうねっていたのであるが、今の大地は肩の荷を下ろしたように静かである。登四郎先生に「さきがくる稲架に幾つの祝ぎ言葉」の御句があるように、本来なら今頃の田んぼには稲架の列があつて、人々が米の出来高を話し合うなど賑やかなものであつた。

しかし、今は専業農家の減少や後継者不足という問題もあり、田んぼで見かける人も少ない。それに伴う機械化を便利と言うべきか、稲刈りは家族総出というよりも稲刈り機と軽トラがあれば夫婦二人でも出来るのである。そして刈り取つた稲穂も軽トラで運び乾燥機に掛ければ、稲架も必要なく二、三日で新米となつて出てくる。俳句作家にとつて稲架の景色を詠むには、山峡の段々畑などへ出かけなければなるまい。稲架のある日本の農村の豊かな秋の景も、天日干しの美味しいお米も懐かしいものとなるのである。